正しい（？）ドイツレクイエムの聴きかた（2023）

偏狭で食わず嫌いの私は、これまでに書いた『正しい（？）〇〇の聴き方』の中でも、「私はハイドンを馬鹿にしていた」とか、「ベートーベンは嫌いだ」などと怪しからぬ記述を繰り返してきた。合唱団の女性の方々が異口同音におっしゃる「ブラームスのドイツレクイエムはとても美しいのよ！」という礼賛の言葉に対しても、内心「何がブラームスだよ！」と思っていたのであった。なぜ私がブラームスに対してネガティブな思いを持っていたかを解析してみると、実は若い頃に読んだサガン作「ブラームスはお好き」という書物に思い至る。この小説は、美貌の夫との安楽な生活を捨てた 39 才の女性が 15 歳も若いナイーブな青年の気持ちを散々に振り回すといったような内容の、とても“良い子が読むような本”ではなかったので、当時は純朴で超真面目な若者であった私はこの本にある種の拒否感を抱き、ついでに（見当はずれにも）ブラームスに嫌悪感を抱いたのかもしれない。

しかし、その嫌悪感は、2 年半前にブラームスのドイツレクイエムを歌う中で霧散した。合唱団の女性の方々がおっしゃる「ブラームスのドイツレクイエムはとても美しいのよ！」という言葉はまさにその通りなのであった。ブラームスは文句なく素晴らしい。ようやくコロナ感染と折り合いがつきそうな状況が見えてきて、これまでの苦しかった 3 年間から離脱できそうな 2023 年 4 月の夕べを、皆さんにはこのブラームスの美しいレクイエムを聴きながら過ごしていただきたい。演奏は 23 日（日）19 時、場所は武蔵小金井の宮地楽器大ホールである。

第１曲は、「Ziemlich langsam und mit Ausdruck（かなり遅く、表情をつけて）」と冒頭に指示が書いてあるように、静かにゆっくりと始まる。かつて郡司先生は練習の時に、「このフレーズを歌うのに感情を込めてはいけない」と言われたが、曲に「表情を付けること」は別なのだろう。素人にはこの区別はむずかしいが、「悲しみの後には喜びが来る」という根本思想のもと、静かにうねるような弦楽器の前奏に続いて、「Sielig sind…（・・・は幸いである）」と歌いはじめると、暗闇から何かが浮き出てくるような「曲の表情」を感じる。ここを聴くだけでもこのレクイエムの美しさがわかってしまうのだが、この旋律と言葉は終曲の一番最後にも、調を変えて登場するので覚えていてほしい。

第２曲は合唱による葬送行進曲である。「人生は花のようで、いずれは枯れて散る」というような元気の出ない歌詞（ペテロやヤコブのようなキリストの使徒による言葉）で始まるこの合唱は、巡礼達の列が延々と続いている様子のようにも聴こえてくる。途中で少し揺れ動くような部分があるのだけれど、また葬送行進曲のリズムに戻っていくので、歌っていて些か元気が出ない。しかし、「神の救済を受けたものは喜びを得る」という喜びを歌う後半部分は、信念を歌い上げる壮大な4拍子の曲、高揚感にあふれた合唱となる。合唱をそこへ導くのは、通常はあまり光の当たらない我々バスパートである。後半最初の６小節ほどを歌うバスの声を、「あっ、バスの人たちがいた!」と再認識しながら聞いていただきたい。この合唱では、ベートーベンの第９のように「Freude！（喜び！）」という言葉が何度も歌われることにも注目（注聴）である。春を迎えた歓喜（換気ではなく）の時間を共有したい。

第３曲では、バスのソリストが登場する。聖書の詩編に記された内容、「私たちは大した人生を送ったわけでもないのに、口を開けばいろいろと不平や文句を言うばかり。こんな空しい人生をどうし

たらいいの？}というようなことをソリストが歌い、同じセリフを合唱団が形を変えて歌うのがこの曲である。自分自身のことを思えば共感を持って歌えるだろう。今回、合唱をリードしてソロを歌うのは、我々にとってはおなじみの若手歌手、原田光君である。どんどん立派になっていく原田君が、今回どのように我々を導いてくれるのかも楽しみである。この曲の最後の部分は、各声部がずらしながら歌い継いでいくフーガである。我々の不安な気持ちや焦燥感はちゃんと神に伝わるだろうか？

第4曲　有名なモーツアルトのレクイエムにはlacrimosaというとてつもなく美しい曲がある。女声の合唱団員はここを歌いたくてしょうがなくて、練習でそこをスキップされると身をよじって慨嘆すると言われている。ドイツレクイエムの第4曲は、このlacrimosaに匹敵するような美しい曲だ。ドイツレクイエム全7曲（7楽章）の中央に位置し、「Wie Lieblich…（なんと愛らしい・・・）」と歌い始めるこの曲が嫌い、という人がいたらお目にかかりたいものだ。

第5曲（実際には一番最後に作られた曲）ではソプラノのソロが登場し、この曲のほぼすべてを支配する。合唱の出番はあるものの、それはソプラノの歌唱を支えるだけで、合唱団の主体性を発揮する場は与えられていない。しかし、私はこの曲が好きだ。ソプラノの歌う旋律がことさら美しい。初めてこの曲を聴いた時（バレンボイムの指揮で、エディット・マティスがソプラノ）、私は彼女の美しい歌唱に強烈な色気すら感じて狼狽してしまった。いかん、いかん。レクイエムを聴いているのに何を考えているんだ！しかし、悩ましい風情で声をかけてくるような38小節目からのフレーズは何なのだろう？セリフも謎だ。

この曲の前半は、ヨハネによる福音書16章の「今は不安かもしれないが、いずれ私との再会の喜びが来るから」という内容、後半はイザヤ書66章にある「母が子を慰めるように、私もあなた方を慰める」という内容で、いずれもイエス（神）が民衆に語りかける内容であるのに対し、両者の中間に位置するこの「悩ましいフレーズ」の内容は、「いかに私は労少なくして、大きな休息を得たかを見よ」というもので、意味不明である。この文章は、いわゆる聖書ではなく、「ベン・スラの智恵」と呼ばれる古代の書物（賢く生きる術や倫理について記されたもの）の中から引用（51章27節）されたものである。そこで、この文書をネットで検索し、発見した英語版の該当箇所を見たのだが、そもそもこの「大きな休息を得た”私”」というのが誰のことか一向にわからず、この手の分野において無知蒙昧な私にはまったくお手上げ状態であった。しかし、ある日の練習で郡司先生がクララ・シューマンのことを話された時、私は怪しい仮説に到達した。ブラームスはシューマンと親しく、シューマンが亡くなった後は40年にわたって夫人のクララの面倒を見たという。婚約寸前まで行ったとも聞く。私の仮説は「ブラームスは、このソプラノの歌詞を通じて、ブラームスがクララから聞きたかった言葉を伝えたのでは？」というものである。歌詞の中の「Ich(私)」はイエスや神ではなく、クララだと思うと、このソプラノ独唱に感じられる色気の説明がつくように思うのである。ただし、あまりにも怪しく、不敬でさえある仮説なので、ここだけの話にしていただきたい。

第6曲はバスのソリストが再び登場する大規模な合唱曲である。テーマは「死の恐怖からの脱却」であり、「天のラッパが鳴れば、死も消え去る→神への賛美」といったところだろう。不安定な調の中で静かに始まる合唱に、やがてバスのソロが侵入し、合唱団を目覚めさせ、ついには死を追い払う力

強い叫びを持って、3拍子の速いパッセージの合唱を誘導する。その合唱が「Sieg！（勝利）」という咆哮が終わるか終わらないうちに、アルトがそれを引き継いで4拍子の神を讃える長大なフーガへと誘導していく。最後は「Kraft!（力）」という全員の叫びをもって終了するこの曲は、歌っていて充実感を感じる。ここで終わって拍手喝采でも悪くない。しかし、このレクイエムの本領はやはり次の終曲にあると言わざるを得ない。

第７曲（終曲）は、またまた素晴らしく美しい。人生を肯定的に振り返る「働いた後の平安な死」がこの曲のテーマであろうか。第１曲と同じ「Selig sind...」という言葉を別の旋律に載せて歌い始めるソプラノの歌声は、暗闇が去り、静かに明けていく山岳の姿が目に浮かぶような美しさだが、その言葉と旋律を引き継いで歌うバスの歌声も捨てたものではないはずである。このバスパートの歌唱が終わると、今度は全パートが集まって曲はうねるように膨らみ、そして消えていく。そして次はテノールパートの出番である。その美しい歌声に再び全パートが寄り添う。そして 143 小節目には、第１曲の最初のテーマが調を変えて静かに登場するのである。ここから先は、一か所を除いて。ピアノ（p）とピアニッシモ（pp）の世界である。我々合唱団は小さなピークを越えながら静かに稜線を下り続け、低地に降り立って山頂を、空を見上げる。最後にオーケストラの音だけが静かに天に昇っていくのを見つめながら、我々のドイツレクイエムは幕を閉じるのである。ああ。こんな文章を書いているだけで涙が出てきたぞ。可能であれば、このドイツレクイエムで示されたような人生の終末を迎えたいものである。

（2023 年３月　　清水　誠）